

中

二

病

都

惠
司

中二病

中二病という病気がある。未だに有効な薬はどの製薬会社も開発できていないらしい。それくらいの難病なのである。ある者にとっては不治の病でもある。大抵の者は、高校生になり就職するか、大学生になり就職するか、大学院生になり就職するかして、時が経ち、社会に出て、完治するはずなのだが。

鳳秋也は中学二年生だ。中二病にかかり易い年頃である。しかし、彼にはその心配はなかった。なぜなら、秋也は二年前、小学六年生のときにすでに罹患していたからだ。かれこれもう二年もこの病気と付き合っていることになる。秋也の中二病は、侍憑依型ウイルスによる、言語中枢の侵害だった。

「なあ、秋也。遊びにいかねー？ 塾あるんだっけ？」

「塾は休みであるので、拙者も行くでござる」

秋也のこの病はまだましな方だと自分では思っている。しかし、友人から見ると、重度な病であると認識されている。

「おまえも本当に時代劇好きだよな。でも、割といい加減だよな。詰めが甘いっつうか」

「そんなことはござらん。拙者、完璧に使いこなして候。それで、どこへ行くでござるか」

「ござるの汎用性って高いよな。そうだな。今日は歩いて駅まで行こうぜ」

かく言うこの友人、浅野智樹も罹患している。ときどき魔の者が見えるという眼の病気にかかっているのだ。眼の病気というよりは頭の病気かもしれないのだが。智樹の発症はわりと最近だった。確かテレビで『魔魔魔魔魔』というアニメが始まってから、智樹の症状は見つかった。それまでの智樹はむしろ周りの患者たちを馬鹿にする傾向があった。しかし、罹患して以降は不思議と仲良くなった。

クラスでは智樹のほかにも似たような症状の生徒が何人かいた。

額にマジックで第三の目を描いていたり、眼帯をしてきたり、包帯をぐるぐると全身に巻いてきたり、民族衣装で登校したり、コンセントに針金を突っ込んだりする人もいた。

また、突然ハンターになると言っただけで家を出たり、忍者の修業を始めたり、死神が見えるようになったり、海賊王を目指したり、見た目は子ども中身は大人とか言いだしたり、巨人と戦い始めたり、つい立候補して生徒会長になってしまったり、話すバイクと旅に出たり、閉店間際のスーパーで弁当争奪戦を繰り広げたり、カメハメ波を撃ってみたり、槍を持って虎と旅に出たり、狼と旅をしたり、他の人には見えない霊にとり憑かれて囲碁を始めたり、人を殺せるノートを拾ったり、小学生とバスケットボールを始めたり、図書館で戦争したり、元傭兵という設定で通学したり、魔法少女になって魔女になったり、etc…。

それぞれ、すこしずつ症状は違っていた。ただ、病院へ行っても原因不明とされることが多いため、対症療法での治療くらいしか手は無かった。中二病に万能薬は存在しなかった。

秋ももうすぐ終わりで、北風がすぐそこまで来ていた。それでも歩いて駅まで向かうのには理由があった。学校と駅の間には焼き芋屋がある。値段は一つ三〇〇円で中学生には少し高いが、甘くておいしいサツマイモなので人気があった。

二人の手の中には、ほくほくおいしいサツマイモがあった。石焼き芋用の焼き機でじっくりと焼かれたそのサツマイモは皮は半分焦げかけていた。しかし、焼き加減は絶妙だった。両手で二つに割ると、甘みのある湯気とともに中から黄金の身が姿を現した。

「っは。うめえ。芋。芋うんめえ、なあ」

「おいしい」

秋也はあまりのおいしさにござるを忘れた。

「……でござる」

智樹の方をちらりと見やると、焼き芋に夢中で全然気づいていなかった。

秋也は近頃、うすうす感じ始めていた。自分は、自分の中二病は治り始めているのではないかと。確かに侍は好きだ。あの佇まい。髪型。着物。刀。あの言葉遣い。信念。矜持。

それでも、どんなに好きでもずっとは続かないんだと秋也は思っている。ずっとこの情熱が維持できるとは思っていない。これまで二年間、大体どんなときも侍言葉を通してきた。しかし、最近になって周りを変な言葉遣いや格好をし始めてから、ようやくその恥ずかしさに気づき始めたのだ。特に、智樹と一緒に歩いていると、嫌でもそう思われる。

「う、うわあああああああああっ」

芋を食べ終えて、ごみ箱に包み紙を捨てしばらく歩くと、駅に着く。もうすぐ着きそうで通行人も増えてきたときに、智樹は叫び始めた。

「に、逃げろっ。秋也っ。……っ早く。俺のことはいいから、早く逃げろおおおっ」

一体、何から逃げろと言うのか？ 秋也は智樹の目線を追うがその先には、なにもない。とりあえず走り、つき合っただけでやることにするがちらちらと通行人の目が気になる。五〇メートル位走って振り返ると、智樹は未だ一般人には見えない剣を振り、見えない敵との戦いを続けていた。これで一〇回目だった。最初にこれが起きた時は、本当にびっくりした。休憩時間、何かにとり憑かれたように叫ぶ智樹を見て戦慄を覚えた。思わず、秋也も一緒に戦おうとしたが、いかにせん見えない敵である。戦い方がわからず、他の友達と一緒に眺めていることしかできなかった。

戦いを終えた智樹が秋也に追いつくと、汗を拭いながら「今日のは強敵だったぜ。右腕を持っていかれそうになったんだ。秋也は無事だったか？」と言った。どこからどう見ても智樹の右腕は無傷である。かすり傷一つ、ついていない。

「あ、ああ。おかげさまで」秋也は苦笑いを隠せなかった。

駅に着いた二人がとりあえず、ゲーセンに行ってからぶらぶらと本屋で本を眺めていた時だ。

そこへ、もう一人の中二病患者が現れた。見ただけで患者と分かるつわものだった。智樹と同じく、ごく最近発症した女の子だ。

「理乃ちゃん。な、なにその格好？」秋也は一步下がりながら訊ねた。

理乃と呼ばれた女の子は、眼帯をしてテンガロンハットを被り、腰には一本刀を刺して茶色いブーツを履き、ひざ丈チェックのスカートに、上着は白衣だった。「変」という言葉は今の彼

女の格好のためにあるかのようにじっくりくる。変な格好だった。

「何って？ 知らないなんて。鳳君」

「何？ 知らないのか、秋也」

理乃と智樹は秋也を見て、心底不思議そうな顔をした。

「「大人気のドクターカウ・サナダ」」

大人気？ これが。この格好が！？ 統一感無さ過ぎだろう。一体どこで大人気なんだ。秋也は訝しげな視線を理乃に向けた。理乃は微笑んで、

「女子中高生の間で大人気のキャラクターなの。アメリカ西部出身の医者で自分の目を治すために旅をする孤独な男。旅先では、無償で困っている人の治療をするの。自分だってそんなにお金を持っているわけじゃないのに、助けるの。旅先で賊に襲われてもこの刀一本で賊を全滅させちゃうんだ！ そんなところが、好き」と言う。

その無邪気な笑顔に秋也と智樹は心を奪われる。二人は理乃にときめいていた。

「結婚するなら、カウ・サナダみたいな人がいいの」

その日から、秋也と智樹は剣道部の入部を決意し、高校受験すらまだなのに医学部志望になった。

(終)

・ 入学した頃のこと（序章**OR**結末）

「おれはもうお前にはいじめられることもないし、関わることなんかない」

秋也は無視をせずと言う。無駄に敵意を見せず、冷静にそう話すことのどれだけ難しいことか。確かに、良い学校を目指せばいいと言ったのは秋也だったが同じ学校に来いとは言っていない。

「てめえは言った。俺の気持ちができるのは、皮肉にもてめえだけだって。だったら、てめえの気持ちができるのも、俺だけだろうが」

秋也は目を合わせないで言う。あさっての方向を向いている。

「そんなことない。全国には、いっぱい似たような状況の子がたくさんいるんだ。話せばお前なんかよりずっと……ずっと分かってくれるはずだ。友達にもなれる」

「じゃあ、俺が一番目だ」

どの口がそんなことを言う。智樹に向き直り、憎しみのこもった目で秋也は睨みつけた。

「俺が、その中でてめえと一番最初に、話した。……悪いとは思っている。今までしてきたこと、全部自分に返ってきてはじめてわかった。悪かった。俺はてめえにとって最悪な奴だったと思う。ごめん。ごめんなさい。すまん。すみません。すまない」

秋也は途中からどこか変だと感じた。智樹はこちらではなく自分の手を見て話している。よくよく智樹の手を覗きこんでみると、手に謝罪の言葉がびっしりと書き込まれていた。

「ぷっ」

絶対許す気なんてなかったのに。それなのに。その手を見たらどうでもよくなった。

「おれはお前と友達になんかなりたくないけど、でも、どうしてもって言うのなら」